

## シリーズ 「発達に違いのある子どもたち」

市では、「障がいのある人、ない人にかかわらず だれもがいきいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念としてさまざまな施策に取り組んでいます。

今回も、市内で子どもの発達支援に取り組まれているNPO法人「まいすてっぷ」から、発達に違いのある子どもたちについて市民の皆さんに正しく理解いただくために、文章を寄稿していただきました。

問合せ先 福祉課福祉政策係☎ 1111（内線 2809）

### 「コミュニケーション能力の発達」

広報1月号に掲載された「幼児期のことば」の中で、話すことばは子どもの発達の「氷山の一角」と述べたように、身体全体の発達や安定した日常生活の中での共感、豊かな感覚や運動の経験などの上に「ことば」は成り立っています。そしてコミュニケーション能力の発達は、ことばを発するようになる前の「乳児期」からすでに始まっています。

生まれてすぐに赤ちゃんは、泣いて不快を知らせ、そして泣き止むことで満たされたことを知らせます。なぜ泣いているのか、気持ちを汲み取ろうと必死でかけられる優しいお母さんの声、あたたかい手の感触や心地よい肌のぬくもり、おっぱいの味や匂い、その中で育まれていく快いという感覚の共有や視線の共有は、コミュニケーションの発達の原形とも言えます。

生後間もない時期の赤ちゃんの目は、お母さんのおっぱいを飲みながら見るお母さん

の顔あたりの距離が見えやすいです。やがて発育とともに赤ちゃんの視線は、お母さんの目を見つめることから、お母さんが視線を移した先にある「もの」へと移っていきます。これを「視線の共有」といい、お母さん、赤ちゃん、二人が見た「もの」という三者の関係を「三項関係」と言います。赤ちゃんはお母さんを介して新たな「もの」への関わりを広げていき、そして、お母さんを基地としてさまざまな冒険を始めるので

うとする、それがコミュニケーション意欲であり、コミュニケーション能力です。逆に言えば、どれだけ難しいことばを覚えて発したとしても、そこにいる人と「テーマ」を共有する意思がなければ、コミュニケーションとは言えないので。

「もの」はいずれ「ことば」で表現することができるようになります。「みかん食べたい」と要求したり、「みかんなくなつたよ」と報告したり、「みかんおいしいね」と感想を述べたりと、目に見える場所に実物の「みかん」がなくとも、「テーマ（話題）」として他者と共有することができるようになります。

赤ちゃんが成長し、話すことばを獲得する頃、三項関係

の「もの」の部分はコミュニケーションの「テーマ」となっていき、「テーマ」をこなつて、十分に表せない時は、視線や声、指差し、ジェスチャーなどあらゆる手段を使つて、聞き手とやりとりをして、聞き手と一緒に行動するコミュニケーション能力です。

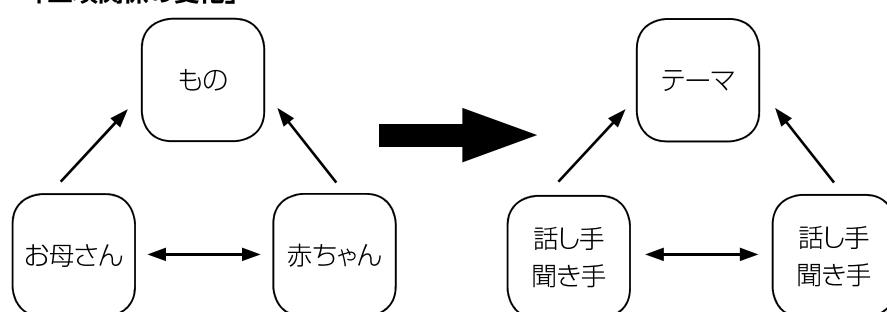
スチヤーなどあらゆる手段を使つて、聞き手とやりとりをして、自分が持つ段を総動員して相手に伝えようとする、それがコミュニケーション意欲であり、コミュニケーション能力です。

逆に言えば、どれだけ難しいことばを覚えて発したとしても、そこにいる人と「テーマ」を共有する意思がなければ、コミュニケーションとは言えないので。

コミュニケーション障がいとは、話せない障がいのみを表すのではなく、ことばは話せるけど他者と「テーマ」を共有できない、場面に不釣り合いなことばを発してしまって誰に話しかけているのかわからない、といったことも含まれます。

ミングよく「テーマ」を変え、話し手になつたりする高度な技術が、他者とコミュニケーションをとるために必要になります。子どもの目線に立つて、大人が良き手本を示すことが、子どものより良いコミュニケーション能力の発達を導くこととなるでしょう。

#### 「三項関係の変化」



#### 〈参考文献〉

子どもとことば／岡本夏木 著 岩波新書

NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援 まいすてっぷより発信 cocomy.jpで検索